

合理的なアクラシアはいかにして可能か
How Is Rational Akrasia Possible?

高山馨

Abstract

This paper presents arguments in defense of the possibility of rational akrasia. It is commonly thought that acting against one's best judgment is always irrational. However, some philosophers, following Robert Audi, have argued that it can be rational. I suggest that the difference between proponents and opponents of the possibility of rational akrasia is not only a difference in what to consider most important in the discussion (e.g. the substantive merits of an action or the procedural consistency of practical reasoning), but also a difference in how they think about the rationality of an action.

(1) 研究テーマ

本稿が論じるのは、「アクラシアは常に非合理である」という一般的見解を拒否し、「合理的なアクラシアが可能である」と主張する議論である。

(2) 研究の背景・先行研究

「自身の最善の判断（ないし、より良い判断）に反して行為すること」とされるアクラシア^{1,2}（ないしは「意志の弱さ」）は、実践的非合理性の典型例の一つだと考えられてきた（Stroud and Tappolet 2003; Tappolet 2013）。デイヴィドソンは、アクラシアをめぐる現代の議論の古典である Davidson（1970）において、アクラシア的行為は可能であるという主張を擁護したものの、そのような行為は、デイヴィドソンの言う「自制の原理（principle of continence）」に反しており、非合理的だとみなしていた。「自制の原理」とは、端的に述べれば、「自身の最善の判断と一致するよう行為せよ」という要求である。自制の原理を合理性の原理だとみなすならば、自身の最善の判断に反して行為することとして特徴づけられるアクラシアが常に非合理だとされるのは、自明であるように思われる。

しかしながら、ロバート・アウディを始めとする論者の中には、自身の最善の判断に反することが合理的になる場合がある、すなわち、合理的なアクラシアが可能であると主張する者がいる（Audi 1990; McIntyre 1990; Arpaly

2000, 2003; Brunero 2013; Hrishikesh 2017)。

以下、最初期に議論を提示した Audi (1990) を中心に、合理的なアクラシアを擁護する議論をごく簡単に概観する。あらかじめ先行研究における大きな応答方針の一つを確認しておくならば、それは次のようなものになる。すなわち、「行為者のより良い判断それ自体も間違いうるため、誤った最善の判断に反して行為する方が、結果的に合理的な行為を行うことになる場合がある」という方針である。

また、語彙の確認として、「最善の／より良い判断 (best/better judgement)」とは、「道徳的、非道徳的考察を含む、あらゆる関連する考察を総合すれば、行為者 A は行為 ϕ すべき」という判断を指す。ここでの「考察 (consideration)」を「理由」と同一視することで、この判断は次と同値になると考えられる。すなわち、「A は ϕ する決定的な／最大の理由を持っている」。なお、本稿では、「決定的な／最大の理由」は、「A が持っているさまざまな ϕ する理由、 ϕ しない理由を総合すると、 ϕ する理由の方が相対的に強い」という理由の相対的な重みづけを意味する³。

2.1 アウディの議論

Audi (1990) は、以下の事例を用いる (Audi 1990, 276-277)。

相応の罰を与えようとするジョン：

ジョンは、彼の娘が土曜の夜に外出することを許可すべきでないと信じている。なぜなら、外出を禁止することは、娘が勉強すべきときに電話をしていたことに対する相応の罰だと考えているからである。相応の罰を与えるべきだという考えにコミットしているジョンは、いざ娘に外出禁止を言い渡そうとした際、娘がかなり動揺するであろうことを悟り、厳しく叱ることで許すことにして、外出を許した。

ジョンは、自分は娘に外出を許可すべきでないと信じているが、それに反して外出を許可する。一見すると、ジョン心的状態は整合しておらず、その振る舞いは非合理的である。しかし、アウディによれば、上記の事例において、ジョンを単純に非合理とみなすことはできない。なぜなら、その判断は、あくまでも、ジョンの事例をどのように詳細にするかに依存するからである。アウディの議論を簡潔に述べると以下のようなになる (Audi 1990, 277-279)。

1. 娘に罰を与えないことにうまく整合するような心的状態が存在すると

する（例えば、罰を与えることは人を傷つけるだろうという信念や人を傷つけないという欲求、罰を与えることは娘から反発を引き起こすという信念と娘に反発されたくないという欲求など）。

2. そうした欲求や信念は「ジョンの性格に深く根ざした正当な理由 (good reasons rooted deep in his character)」を構成する。
3. ジョンの持つ「娘に罰を与えるべきだ」という信念それ自体は、ジョンの性格や利害関心、理想とは整合しておらず、非合理的な信念である
4. それゆえ、ジョンが罰を与えるべきだという自身の最善の判断に反して行為することは、それに一致して行為するよりも、ジョンの心的状態全体にうまく整合しうる。
5. したがって、最善の判断に反することは合理的でありうる。

アウディは、ジョンの心的状態の全体的な整合性のうちに、ジョンの合理性が保たれていると考えている。つまり、一見すると局所的に不整合が生じているように思える行為者の心的状態も、全体的／総合的に見ると問題なく整合している。それゆえ、最善の判断に反することも合理的になりうるのだ、というわけである。ここでのジョンの事例は、アウディのメインテーゼである「合理性は全体論的な概念でなければならず、そうであるならば、ある種のアクラシア的行為は合理的でありうる」(Audi 1990, 280) という主張を支持するために提示されたものである。

他方、この議論においてアウディは、合理的な行為とはどのようなものかという点に関して、いくつかのモデルを提示し、そのうちの一つである「理由のバランスモデル (the balance of reasons model)」を支持する。このモデルによれば、合理的な行為とは、行為者の持つ十分に正当な理由に基づいて、適切な方法でなされる行為である。したがって、上述の議論のステップ 2-4 を踏まえると、ジョンが、ある限定された範囲では、最善である判断に反して行為することは、その結果として自身の持つ正当な理由に基づいて行為することとなり、当該のアクラシアによる行為が合理的な行為とみなされるようになる。

とはいえ、アウディは、たとえ合理的なアクラシアが可能であるとしても、アクラシアが、ある程度、その合理性に反しているということ（つまり、ある程度、非合理であることを認めた上で、「最高度に合理的でなくとも、ある行為はバランスの上で合理的でありうる」と主張するのである (Audi 1990, 280)。ここで認められる、アクラシアの合理性はあくまでも相対的なものだ

という点は、3節でその問題点を確認する。

2.2 アウディ以後の議論

Audi (1990) 以降のアクラシアの合理性に関する議論は、基本的に、アウディの議論の枠組みを引き継いでいる。そして、行為者の最善の判断の特権性を弱めることで、そのアクラシア的行為の実質的な合理性を示すという形式を採ることが多い。

McIntyre (1990) において、マッキンタイアは、行為者の「より良い判断」は実際には適切に包括的な判断ではなく、関連するすべての考察事項を考慮に入れていない可能性がありうると主張する。具体的には、『ハックルベリー・フィンの冒険』の主人公ハックのような、次の事例を念頭に置いている (McIntyre 1990, 380; 同様の事例を用いる議論として、Bennett 1974; Arpaly 2003; Brunero 2013; Hrishikesh 2017)。

ハック・フィンの事例：

ハックは、逃亡奴隷のジムを、その「所有者」であるワトソン夫人の元へ返すかどうか迷っている。ハックは、当時の支配的な価値観に則り、ジムはワトソン夫人の「所有物」であり、正当な持ち主に返還すべきだと信じている。そのため、逃亡を助けたことに良心の呵責を覚え、ジムをワトソン夫人の元へ返すことを決心する。しかし、いざその機会を得た際、決心を実行に移せない自分に気づき、ハックは自分の弱さを責め、友人を守るためにジムを探しにきた賞金稼ぎたちに嘘をつく。

マッキンタイアによれば、ジムをワトソン夫人の元へ返すべきだというハックの判断は、主にジムをワトソン夫人の所有物だとみなす考えに基づいており、ハックの持つジムへの友情や愛着といった強い感情、その他の関連する要因を無視している。そのため、ハックの「より良い判断」は、実際には十分に包括的な判断ではなく、関連するすべての考察事項を考慮に入れていない。そのため、この時ハックが最大の理由を持つ行為とは、実はジムの逃亡を助けることなのだ、というわけである。それゆえ、マッキンタイアは、「アクラティックな行為者は、最大の理由を持っている行為を自分が行なっていると信じていなくても、それにもかかわらず、行為者が追求している行為は、行為者が追求すべき最大の理由を持ったものであるかもしれない」と主張するのである (McIntyre 1990, 385)。マッキンタイアによれば、行為者が実際には自身の持つべき最大の理由を適切に認識していなかったとして

も、実質的にその理由に基づき行為することが可能である。そして、 ϕ する最大の理由に基づき行為することは合理的であるため、合理的なアクラシアが可能となるのである。

同様に、Arpaly (2000, 2003) でも、行為者の最善の判断の特権性は低く見積もられる。とりわけアーパリーは、「合理性の理論は、行為者の最善の判断に何か特別なものがあると仮定すべきではない。行為者の最善の判断は、単なる信念の一つにすぎない」とまで述べている (Arpaly 2000, 512)。アーパリーによれば、われわれは自分が何をすべきかについて誤った信念を持つ可能性があり、その信念に反して行為することで、正当な理由のために行為することができる。そして、正当な理由のために行為することは、合理的に行為することなのだと主張するのである。

(3) 筆者の主張

合理的なアクラシアの可能性を擁護する議論を概観したが、先に述べた通り、その基本的な方針は次のようなものであった。すなわち、「行為者のより良い判断それ自体も間違いうるため、誤った最善の判断に反して行為する方が、結果的に合理的な行為を行うことになる場合がある」というものである。

しかしながら、上述のオーディに加え、マッキンタイアやアーパリーたちも、アクラシアを単に合理的だと捉えているわけではない。彼／彼女らの主張は、自身の「最善の判断」に反して行為する方がそれに従うよりも、より合理的でありうるという、あくまでも相対的な評価における合理性の主張である。すなわち、自身の判断に従う行為と比較して、それに反して行為する方がより合理的な場合がありうる、と主張しているのである。

この点に関して、一つの単純な問題は、Brunero (2013) が指摘するように、自身の最善の判断に従う行為とそれに反する行為の両方もが非合理であるかもしれない、というものである。つまり、ある選択肢は他の選択肢よりもより良いものでありながら、結局どちらも悪い選択肢である可能性がある (Brunero 2013, 551)。例えば、のっぴきならない状況において、指を1本犠牲にして失うか、それとも2本失うか、といった場面があてはまるかもしれない (指を2本失うよりも、1本失うほうがより良い選択肢であろう)。しかし、この点に関しては、それぞれの個別事例の詳細を特定することで、たとえ「合理性」が相対評価における語として用いられていたとしても、非合理な中でのどنگりの背比べという事態に該当しないケースを見つけることは可能であろう。そうであるならば、「自身の最善の判断に反して行為するほうが、相対的にも実質的に合理的でありうる」という主張は、さしあたり

維持することができる。

より根本的な問題点、ないし相違点は、Stroud and Svirsky (2019) が指摘するとおり、合理的なアクラシアの可能性を擁護する論者たちがアクラシアによる行為の実質的なメリットを強調するのに対して、アクラシアは常に非合理だという見解を維持する論者は、そもそもその点を問題として扱わないかもしれない、ということである。なぜなら、アクラティックな行為者の行為が結果的にどれほど成功を納めたとしても、その行為者の実践的推論には、依然として手続き上の欠陥が存在するからである。たとえその行為が実際には正当な理由によって支持されているとしても、別の行為を支持する判断を下した行為者がそのことに気がついていない以上、その行為者の推論ステップには何らかの誤りがあることが示されている。推論に失敗しているため、推論の基礎ないしは帰結となりうる信念や意図などの心的状態が整合しているとは言えず、そのアクラシア的行為は常に非合理的なのである。

伝統的見解の擁護者がこのように主張するのに対し、合理的なアクラシアの擁護者は、あくまで、たとえ行為者の心的状態が局所的に不整合であったとしても、実質的に行為が正統な理由に支持されているならば合理的なのだ、と主張する。両者のこのすれ違いは、議論における強調点の違い (e.g. 行為の実質的なメリットか、実践的推論の手続き的な整合性)、ひいては行為の合理性をどのようなものとして捉えるかの違いに帰着すると思われる。次節では、この点を確認する。

(4) 今後の展望

3 節の最後で触れたように、アクラシアを非合理とみなす伝統主義者と、アクラシアが合理的でありうるとする論者の相違について、その問題点を端的に述べるならば、両者の「行為の合理性」理解が異なっているのではないかと、ということである。「アクラシアは常に非合理である」という主張と、「合理的なアクラシアが可能である」という主張における合理性理解が異なっているならば、その点を整理しない限り、議論の成立は難しい。したがって、合理的なアクラシアの議論においては、「アクラシア」がどのような現象を指示するのかといった問題設定の確認に加えて、そもそも行為の合理性をどのようなものとして捉えるかという点が重要な論点の一つとなりうるのである。

最後に、行為の合理性についてよく区別される二つを確認し、その区別によってアクラシアをめぐる論争を整理し直す可能性について述べることで、本稿を閉じる。

行為の合理性については、主に次の二つの見解がある (Hinchman 2013)。

第一に、「合理的であるとは、行為者の心的状態が適切に関係し合っていることだ」とする見解、第二に、「合理的であるとは、行為者が自身の持つ理由へ適切に応答することだ」とする見解である。この二つは、いわゆる「構造的合理性 (structural rationality)」と「実質的合理性 (substantive rationality)」に対応すると考えられる (Broome 2007, 2010; Kiesewetter 2017; Worsnip 2021)。そして、私の見るところ、アクラシアの合理性をめぐる二つの立場のうち、合理的なアクラシアの可能性を否定する論者たちは構造的合理性を、そして合理的なアクラシアを擁護する論者たちは実質的合理性を採用する傾向にある。ただし、中には Brunero (2013) のように構造的合理性を採用しつつ、合理的なアクラシアの存在を擁護する論者もいるため、これはいまだ見通しに過ぎない。この二つの合理性を用いてこの論争を整理し直し、そのうえで、どちらの合理性が行為を考えるうえで適切なのかを考えることが、今後の課題である。

注

1. より正確には、「行為者 A は自分は ϕ すべきであると信じており、かつ ϕ することを意図しない / ϕ しない」と、差しあたり、定義することができる。ここで「 ϕ することを意図しないこと」と「 ϕ しないこと」を選言的に並列する理由の一つは、実践的推論の帰結が意図であるか、あるいは行為であるか (あるいは規範的信念であるか) を、本稿では、オープンにしているからである。
2. 本稿では、「アクラシア (akrasia)」と「意志の弱さ (weakness of will)」は相互に交換可能な語として扱う。両者を概念的に区別する議論については、Holton (1999) を参照のこと。
3. ここでの整理は、笠木雅史氏の 2020 年度東北大学での集中講義「倫理思想各論・倫理学特論Ⅲ」授業資料に依っている。

(5) 参考文献

- Arpaly, N. (2000). On Acting Rationality Against One's Better Judgement. *Etics*, 110: 488-513.
- , (2003). *Unprincipled Virtue: An Inquiry into Moral Agency*, New York: Oxford University Press.
- Audi, R. (1990). Weakness of Will and Rational Action. *Australasian Journal of Philosophy*, 68: 270-281.
- Bennett, J. (1974). The Conscience of Huckleberry Finn. *Philosophy*, 49:

123-134.

- Broome, J. (2007). Does Rationality Consist in Responding Correctly to Reasons? *Journal of Moral Philosophy*, 4(3), 349-374.
- . (2010). Rationality. in O'Connor, T. and Sandis, C. (eds.) *A Companion to the Philosophy of Action*, Blackwell, 285-292.
- Brunero, J. (2013). Rational Akrasia. *Organon*, F 20 (4): 546-566.
- Davidson, D. (1970). How Is Weakness of the Will Possible? in Davidson 1980, 21-42. [柴田正良訳「意志の弱さはいかにして可能か」『行為と出来事』(服部裕幸・柴田正良訳)、勁草書房、所収]
- . (1980). *Essays on Actions and Events*, Oxford: Clarendon Press. [服部裕幸・柴田正良訳『行為と出来事』、勁草書房]
- Hinchman, E. (2013). Rational Requirements and 'Rational' Akrasia. *Philosophical Studies*, 166: 529-552.
- Holton, R. (1999). Intention and Weakness of Will. *Journal of Philosophy*, 96: 241-262.
- Hrishikesh, J. (2017). What's the matter of the Huck Finn? *Philosophical Explorations: An International Journal for the Philosophy of Mind and Action*, 20: 70-87.
- Kiesewetter, B. (2017). *The Normativity of Rationality*, Oxford University Press.
- McIntyre, A. (1990). Is Akratic Action Always Irrational? in O. Flanagan and A. Rorty (eds.). *Identity, Character, and Morality*, Cambridge, Ma: MIT Press, 379-400.
- . (2006). What Is Wrong with Weakness of Will? *The Journal of Philosophy*, 103(6): 284-311.
- Stroud, S. and Svirsky, L. "Weakness of Will", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Fall 2019 Edition)*, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2019/entries/weakness-will/>>.
- Stroud, S., and Tappolet, C. (eds.). (2003). *Weakness of Will and Practical Irrationality*, Oxford: Clarendon Press.
- Tappolet, C. (2013). Weakness of Will. In Hugh LaFollette (ed.), 2013, *International Encyclopedia of Ethics*. Wiley-Blackwell. 4412-21.
- Worsnip, A. (2021). *Fitting Things Together: Coherence and the Demands of Structural Rationality*, Oxford University Press.

(東北大学)